

学内六報

2015.6.24

no.1469



東京六大学野球2015春季リーグ・対法政大学1回戦終了後



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

東大式「ギャップイヤー」で学生たちがつかんだものとは? FLY Program 2期生生活動報告

東京大学版「ギャップイヤー」で学生たちがつかんだものとは？

FLY Program 2期生

初年次長期自主活動プログラム



↑ FLY Program後
↓ FLY Program前

上は2015年5月、下は1年前の2014年5月に行われた懇親会のときに撮った写真です。それぞれの表情を見比べてみると、確かに成長して帰ってきたことが一目瞭然ではないでしょうか。



前総長と現総長が駆けつけた 注目の活動報告会

駒場の21KOMCEEレクチャーホールにて行われた5月9日(土)の活動報告会には、1年間の活動を終えて大学に帰還した2期生8人が顔を揃えました。五神真総長から「FLY Programを『知のプロフェッショナル』になるきっかけにしてほしい」と開会挨拶が述べられた後、2期生が順に報告を行い、聞き応えのある活動内容を披露しました。

2期生のプレゼンテーション終了後、FLY Program推進委員長として当初からプログラムに携わってきた藤井輝夫先生が総括を述べ、学生支援担当理事である南風原朝和先生からは閉会の挨拶とともに学内外の支援者の皆さんに対する謝辞が述べられました。報告会後には、2期生を送り出した際の総長である濱田純一先生から修了証が手渡され、「自分もこの3月に一旦ルールから外れてみて皆さんの不安がよくわかりました」とねぎらいの言葉も贈られました。

続いてダイニング銀杏にて、3期生の計画発表を主とした交流会を開催。各学生が活動の志を語り、教養学部長の小川桂一郎先生から激励の言葉が贈られ、参加学生と学内外の関係者との活発な意見交換も行われた後、会は盛況のうちに終了しました。いまは幼さが残る3期生も、来春には少し大人びた顔で帰還してくれることでしょう。



「FLY Programの『輪』をこれから大きな『渦』にしていきたい」と思いを述べた五神総長。



29代総長として2期生を送り出した濱田純一先生が会場に駆けつけてくれました。



交流会後に行われた、3期生と担当の先生方による打ち合わせの様様。

活動報告

全学を挙げて取り組んでいる東大版ギャップイヤー、FLY Programの2期生たちが、1年間の活動を終えてキャンパスに戻ってきました。彼らがこの1年間の休学中に何をしてきたのか、何を見、何を体験し、何を感じてきたのかについて、彼ら自身が綴った活動報告書から抜粋してお届けします。

→「平成26年度初年次長期自主活動プログラム活動報告書」



2期生が休学中に見たこと・したこと・感じたこと (報告書より)

中国の駅で、 駅員が乗客に 切符を面倒そう に投げ放って いた	自分なりの 「幸せ」の 定義が 変化した	膨大な数の 先人の協力で 現代社会が成り 立っていると 気づいた	タイで バスから 飛び降りて ケガをした	日本の恋人 から別れを告 げられそうに なった	自分を 罵倒した 自動車学校の 教官と最後は 仲良くなれた
運転免許 取得後に道路を 見て大量の交通 標識の存在に改 めて驚いた	チチカカ湖に 浮かぶ島では 島を形成する 草を食べて いた	アルメニアで 一日一回 は罵倒 された	民族や 文化が違っても 皆毎日ご飯を食 べて寝て生活し ている事実に 気づいた	欧米の人より 中・韓の人の ほうが話が通 じやすいと 思った	南米では 先住民文化が 強い国とスペ イン文化が強 い国の違いが 印象的だった
外見の違いを 意識的に判断 材料から外す ようになった	本当に必要な ものとそれ以外 のものを区別 するようにな った	責任を 感じながら 苦勞して 働く意味を 知った	先進諸国に 内在する貧困の 暗さが非常に 印象的だった	ジェンダー 関連の施設・ 団体を訪れて 話を聞くこと ができた	日米の 学生間で学問と の向き合い方が 違うことに衝撃 を受けた
華やかな印象の ハリウッドだが、 実は 路上生活者が 多かった	東大で 勉学に励む ことの意味を 再確認 できた	「百聞 は一見に 如かず」 を実感した	自分と 正反対の環境 で育った人と 同じ考え方を していた	アメリカは 混沌としてい ながらもどこ かまとまっ ていた	アメリカでは 多くの人が 自分自身に対 して肯定的 だった
計画性の なさや危機管理 の甘さで深夜に 街を歩かざるを 得なくなった	博物館を 巡る中で物理・ 宇宙・情報に興 味があることを 自覚した	他人の目を 気にしながら 行動する癖 を解消 できた	価値観の 異なる人が集う 場では困難な議 題でも洗練され た結論を得やす いと知った	いかに 自分が何も できない男 かわかった	いかに 大学生生活が 可能性を秘め ているかを 知った
日本人は実は 世界でもトッ プクラス級に 適応能力が 高かった	トルコで 1kmほど地面 を掘ってネット 回線のケーブル を通した	恐怖に すくんで 留まることの もったいなさ を知った	教師・ 研究者から旅 行会社設立に 将来の志望が 変化した	副業として 何かの技術を 身につける 必要を感じた	生活を 楽しくする 最大の秘訣は 他者の存在だ と気づいた
「吾以外 皆吾師」 の心を 学んだ	少しでも 他人に変化を 与えられる人間 になりたいと 思った	自分は 思ったより 行動ができる 人間だと 感じた	「壁」は 自分が 勝手に作る ものだと 気づいた	違う文化圏の 人に日本に来 てほしいとの 思いが 芽生えた	この一年は いままでの 人生で一番 楽しい一年 だった

(次ページにつづく)



FLY Program2期生の体験報告①

被災地教育支援活動を行った学生さんの場合



文科一類

中村 彬裕 さん

活動内容

「被災地の教育支援に携わる2つのNPOでの、インターンシッププログラム」

活動カレンダー

月	地域	活動概要
5月	宮城県気仙沼市	仮設住宅の集会所、地域のコミュニティスペースでの、小学生から高校生を対象とした学習支援活動
6月	同上	上記活動に加わる定期的な活動として、老人保健施設での傾聴ボランティア、地元鮮魚店でのボランティア。不定期な活動として、高校生団体「底上げYouth」の活動サポート
7月	同上	同上。加えて週に1回、高校生に対する、大学受験対策に特化した学習支援活動
8月	同上	農業支援団体「VoarLuz」での、田植えや雑草抜きなどのボランティア
9月	同上	同上
10月	同上	同上
11月	岩手県大槌町	中学生への学習支援活動
12月	同上	中学生への学習支援活動
1月	同上	中学生への学習支援活動
2月	同上	中学生への学習支援活動
3月	同上	中学生への学習支援活動
4月	駒場	大学に復帰

この1年で学んだこととして「場を作る力」を挙げた中村さん。高校では与えられた場を活用しただけだったが、授業という場を「作る」立場になり、その場その場で必要な役割を担う必要性を強く感じたそう。「これは、大学に通って授業を聞くだけでは得られない能力」だった、と振り返っていました。

「地域のつながり」を体で実感

私は、2014年3月11日の新聞を読んだときに、自分が東北という地域のことをまったく知らなかったことに気づかされました。

そこで、自分の興味がある教育に携わりながら1年間東北に住むことで現地を知りたいと思いました。高校時代、地方出身の高校生にすごいパワーを感じたことがあり、もう一度そのパワーを実感したいと思ったのも、今回の活動を決めた理由の一つです。

拠点としたのは、宮城県気仙沼市のNPO法人「底上げ」と、岩手県大槌町のNPO法人「カタリバ」のコラボスクール。この2つを選んだ理由は、被災地である、知り合いの紹介もあり団体に対する信頼があった、教育に携われる、という3つでした。

生まれも育ちも東京の私にとって、地方での暮らしは新しい発見と驚きに満ちていました。特に面白みを感じたのは、「地域のつながり」を実感する機会が多かったことです。スーパーで知り合いに出くわしたり、ご近所さんと手土産を交換しあったり……。煩わしさを感じる人もいるかもしれませんが、私にとっては狭いコミュニティで暮らすのが新鮮で面白かったですね。

活動で最も大きな手応えを感じたのは、大槌のコラボスクールでの授業です。授業経験などない私が中学生に90分の授業を行うのは非常に困難で、全く授業がうまくいかない日々が2ヶ月ほどありました。それで



↑大槌のコラボスクールの中学3年生たち。

も、生徒の「できる感」を創出するようなコミュニケーションを心がけるなど、自分なりに授業改善の努力を続け、誰に言われるでもなく毎日12時間以上は仕事をしました。一つの物事にこれだけ集中した期間はこれまでになかったと思います。

生徒が発したうれしい言葉とは？

そうこうするうち、うれしい出来事がありました。ある授業の最後、「え、今日の授業もう終わり？」と一人の生徒が言ったんです。90分という時間の長さに気づかないほど授業に熱中してくれたわけです。さらに、スクールの中学3年生全員が志望校の合格を勝ち取ってくれました。生徒のがんばりをサポートしようと努力してきたことが結果につながり、大きな達成感を得ました。

一方で、東京にいたときの自分がいかに口先だけだったかを思い知らされました。実は休学前、日本の教育を変えたい、自分ならできると思っていました。でも、実際に勉強を教え、現場の先生と話す機会を得てみて、教育を変えることの難しさを実感し、それを簡単に口に出すことの無責任さにも思い至りました。今回ある程度の実践経験が積めたと思うので、大学生活ではこれを十分に活かしながら教育への学問的アプローチも深めたいと思っています。

気仙沼と大槌で暮らしてみても、同じ被災地でも、言葉から文化まで様々な違いがあることを知りました。異文化交流が日本の小さな地域でも十分にできることは後輩の皆さんにも伝えたいですね。



←気仙沼の学習支援に参加した子どもたちと行ったハロウィンパーティーの様子。

FLY Program2期生の体験報告②

有機農園ボランティアを行った学生さんの場合

日・欧で味わった方針の違い

かねてから私は大量生産・大量消費型の社会に疑問を感じており、「持続可能な生活」に興味がありました。実践的英語力習得と異文化交流の好機として海外長期滞在も夢見ていたので、今回の活動では、有機農園でのボランティアとイギリス語学留学、ヨーロッパ周遊旅行を柱としました。

日本ではWWOOFというNGOを通じてつながった千葉県農園「さいのね畑」で合計約6週間、ヨーロッパではスペイン南部の農園で約1ヶ月のボランティア活動を行いました。日本とスペインの有機農園ボランティアでは、環境問題の意識の高い人々と交流し、自分がいかにこの問題に関心だったかを痛感することとなりました。

日本では野菜を丁寧に洗ってビニール袋に包装して配送するのが当然でしたが、スペインでそのことを話したら「なぜ？」と問われて答に詰まり……。主に健康のために有機野菜が購入される日本と違い、ヨーロッパでは生産過程での環境負荷軽減が求められ、ビニール袋で有機野菜を包むなど本末転倒とされていたのです。同じ有機農業でも方針が違うことに驚かされました。

スペインの農園は人里離れた大自然の中にあつたため、自然と人間との関わり方について深く考えさせられ、環境負荷を抑えた生活スタイルの実践がいかに大切か思い知らされました。そのスタイルの実践のた

めに必要な、自然の摂理に逆らわない野菜栽培・収穫の技術、化石燃料に頼らない炊事・洗濯技術も身につきました。

もう一つ、スペインで印象的だったのは、農場主さんから薦められた本が、日本の自然農法提唱者の著書の英語版だったこと。実は農場主さんはこの本の理念に共鳴して有機農業やパーマカルチャーの実践に勤んでいたのです。日本の革新的な理念の提唱者を日本から遠く離れた異国で知ることができたことを幸運に感じました。

他人と比べず暮らす生き方へ

FLY program以前の自分は、他人との比較を通してしか自分を捉えていなかったように思います。今回の旅では、自分と異なる人種、言語、文化を持つ人々に囲まれ、優劣をつけられるほどの共通点を持つ他人に会うことはまれでした。人に会う機会自体が少ない大自然の中で暮らしたことで、自然から連続する人間の中の一個体として自分を捉えるようになった気がします。

これまでは常にやるべきことに追われ、それをこなすことに重要性を感じていましたが、今回、一人旅の中で必要に追われることなく思索に耽り、初めて時間を味わいました。それは心の安息であり、生の実感でした。他者と自己の比較や競争が、神経の衰弱を引き起こすだけでいかに意味がなさを思い知りました。いまでは、自己も他者も所詮は宇宙の一要素にすぎないので、比較や競争をせずに平穏に暮らしたらどんなに美しいだろうかと思っています。



文科三類

村上陸人 さん

活動内容

「日本・欧州での有機農業体験と欧州周遊旅行」

活動カレンダー

月	地域	活動概要
4月	東京	活動資金調達のためのアルバイト
5月	東京 千葉	活動資金調達のためのアルバイト 「さいのね畑」での農業ボランティア
6月	千葉 東京 イギリス	「さいのね畑」での農業ボランティア 活動資金調達のためのアルバイト 語学留学
7月	イギリス	語学留学
8月	イギリス	語学留学 バーミンガム、コッツウォルズを訪問
9月	イギリス	ヨービル、グラスゴーを訪問 化石燃料に一切頼らず暮らすエコビレッジなどを訪問
10月	イギリス アイルランド 東京	エディンバラ、チェスターを訪問 ダブリンを訪問 一時帰国、再渡航準備
11月	東京 千葉	再渡航準備 「さいのね畑」で再度農業ボランティア
12月	千葉 イギリス フランス スペイン	「さいのね畑」で再度農業ボランティア ロンドンを再度訪問し、周遊中に会った人々と再会を祝う パリ、マルセイユ、ニースを訪問 バルセロナを訪問
1月	スペイン	バルセロナ、マドリッドを訪問 スペイン南部の農園「La Baltasara」で農業ボランティア
2月	スペイン ドイツ チェコ ルーマニア	スペイン南部の農園「La Baltasara」で農業ボランティア ベルリン、ミュンヘン、フライブルクを訪問 プラハを訪問 ティミショアラを訪問
3月	イタリア	ヴェネツィア、ミラノ、ピサ、フィレンツェ、ローマを訪問
4月	東京	大学に復帰



↑スペインの農園の洗濯場。全て洗濯板での手洗い。右の建物は風呂場。たき火で湧かした湯で入浴する。



←スコットランドにて、メキシコ、ドイツ、イスラエル、ポーランド、オーストラリアからの旅人と。互いに違いを受け入れる姿勢で話して親密に。

ひょうたん島通信

大槌発! 第26回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



大槌町で変わらないもの

佐藤 光展 大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター事務室係長

大槌町内では、現在、盛土工事が行われています。

この4月から大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターに着任しました佐藤光展（みつのお）と申します。よろしくお願いいたします。

3月までは、岩手県盛岡市にある岩手大学工学部に勤務しておりました。実は、大槌での勤務は今回で2度目になります。以前、海洋研究所附属大槌臨海研究センターという名称だった頃のことですが、昭和61年4月から平成8年3月まで10年間お世話になりました。

その後震災があり、皆さんご存知のことと思いますが岩手県大槌町にある国際沿岸海洋研究センターでは甚大な被害を受けました。現在は3階部分が仮復旧され活動も再開されていますが、機能的に充分とはいえず、教員や学生においては千葉県柏市にある大気海洋研究所と大槌との往來を余儀なくされています。

また、震災によって、国際沿岸海洋研究センターはもちろんですが、町自体が大きく変わりました。現在、被害を受けた地区のあちこちで、盛土が行われており、工事車両もひっきりなしに往來しています。

一方、山・川の形や雰囲気については、昔から変わらないように感じます。高台移転で、山の切崩しが行われている部分もありますが、大体において、昔の面影を感じます。もう一つ、昔から変わらないのが「愛の鐘」です。午前6時には「わ



れは海の子」が、午後6時には「夕焼小焼」のメロディーが流れます。昔から変わらないメロディーを耳にすると、とても安心します。盛岡市に住んでいたときも、「大槌サウンドスケープ配信」を通して、幾度となく昔からのメロディーを耳にしていました。確か「エーデルワイス」のメロディーだったと思うのですが、昔は午後9時にもメロディーが流れていた記憶があります。残念ながら、いつからか無くなってしまったようです。正午には、「ひょっこりひょうたん島」のメロディーが流れます。震災前の音源は流失して

しまい、現在はジャズピアニストの小曽根真さんから提供されたメロディーが流れます。

昔話だけでなく、大槌の美味しいものを紹介したいと思います。カレーや和菓子等美味しいものは色々ありますが、なんといっても大槌北小福幸きらり商店街という仮設商店街にある「めん八喜（ぱっき）」さんの豚汁ラーメンは、ボリュームもあり最高です。あいにく、これから迎えるのは暑い夏ですが、食べ終わった頃にはとても体が温まりますので、寒い時期は特におすすめです。中細の縮れ麺で、野菜たっぷりの味噌味です。同じ味噌味でも、味噌ラーメンとは異なります（でも、味噌ラーメンとの違いが上手く説明出来ません）。

現在、国際沿岸海洋研究センターでは、建物の移転新築が予定されています。微力ではありますが、尽力する所存です。皆さまにおかれましても、引き続きご支援いただきますようお願い申し上げます。



これが、「めん八喜」さんの豚汁ラーメンです。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

あちこちそちこち
東京大学 第3回

本郷・駒場・柏以外の本学を現場の教職員が紹介

東京大学

ソウル国立大学校事務所の巻

事務スタッフ

小島 圭子

안녕하세요 반갑습니다
アンニョンハセヨ! パンガブスムニダ!

ソウルオフィスのあるソウル国立大学153棟「宇庭園」。

東京大学ソウル国立大学校事務所（通称：東大ソウルオフィス）は韓国のトップ大学であるソウル国立大学校（SNU）カナックキャンパス内に位置しています。市民の登山場所として人気のカナック山の麓という広く恵まれたキャンパス環境の中でソウル大の学生、教職員と肩を並べて過ごしています。日本人より日本びいきなソウル大工学部教授がシニアオフィサーを、韓国人以上に韓国を愛する日本人女性が事務を務めています。

2014年6月の開所から早いもので1年が経ちました。最初は手探りでスタートしましたが、蓋を開けてみると思った以上に多様な業務が待ち受けていたのです。

東大進学希望の学生への通訳・翻訳・情報提供、ソウル大交換留学生との交流、ソウル大の日本人教員を中心としたセミナーの開催、PEAK入学試験の面接実施支援、韓国の入試事情についての取材対応、大学総合教育研究センターの国際連携講義システム（U-TOP）発表記者会見への協力……。韓国在住の東京大学同窓生900余名に対し、安田講堂改修寄付の呼びかけや新年会の開催も企画しました。26年度は、戦略的パートナーシップを進める相手校となり、通常の協定より緊密で創造的な関係を築く最初の年度になりました。東大-ソウル大の同窓会も計画されるなど、一層の発展が期待されます。20年来の交流実績を踏まえ、より質の高い交流が出来るよう、当オフィスも支援を惜しみません。

韓国にお越しの際はぜひ当オフィスにお立ち寄りください。安くて美味しいソウル大の学食をご馳走します。



1. 両学長による相互事務所設立調印式（@東大）。2. 東京大学SNU事務所開所式（@ソウル大）。3. 在韓東京大総同門会2015年新年会。4. ソウル大で学ぶ東大交換留学生との対話。

http://www.u-tokyo.ac.jp/res02/d03_01_05.html

第24回
留学生さん
いらっしやい!

海を越えて東大に来た学生に聞きました。



イラン

ファルナズ・カティビ・ジャファリさん

Farnaz Khatibi Jafari

新領域創成科学研究科
先端生命科学専攻 博士3年

現役ジャーナリストでもある彼女は、時折鋭い意見も言いますが、日本に大きな関心を持っています。祭りなど人々の写真を撮るのが趣味。ラスカルが好き。

Q. どうして日本（東大）に来たの?



勤勉で技術力に優れた日本、子供の頃慣れ親しんだアニメを産んだ日本、中東ともヨーロッパとも全く異なる日本に以前から関心がありました。友人からMEXT奨学金の話聞いた時、迷わず応募しました。人文と科学を融合した東大のプログラムは世界でも珍しく、東大に選ばれてよかったと思っています。

Q. 博士課程で何を研究していますか?



人類学と考古学をより科学的な面から研究しています。紀元前の人骨を炭素年代測定などの科学的手法で分析して、死因、生活環境、起源などを解明しています。現在の手法だと破損の多い骨の分析が難しいので、より良い手法を見つけて世界に通用するようにさせていすね。イランは考古学的な宝の山です。



Q. 日本（東大）で困ったところは?



国際化という点では課題が多いように感じます。基本的にすべて日本語なので、日本語ができないと大変。イスラム圏に対する理解も進んでないかな。野菜や果物が高くて困ります。



Q. 日本（東大）の好きなところは?



日本は安全で清潔な国だし、日本人は親切ですね。テクノロジーもすごいと思います。母国にウォシュレットを持って帰りたいです（笑）。



Q. イランのいいところを教えてください!



普通の社会だと言いたいです。ラクダに乗ってテントで暮らしたりしてませんから（笑）。写真のテヘランの街並みを見てくださいね。



協力：国際センター本郷オフィス 制作：本部広報課

ワタシのオシゴト 第112回

RELAY COLUMN

先端科学技術研究センター
財務企画チーム

国井 孝浩

先端、異端、シルヴィバルタン



アルカイックスマイル。

部局の財務担当と言えば、大抵どこでも似たようなオシゴトをしているものだと思いますが、先端研ならではの特徴は、研究者が研究に専念できるよう「運営と研究の分離」を図っていることが挙げられます。

「運営」を担い、所意思決定の大半を行うのが、所長含む8名の教授を中心に毎週開催される「経営戦略会議」で、これにオブザーバーとして常時参加しています。お金絡みの話では、説明・提案・意見を述べる場面もあり、スピード感ある意思決定のサポートができるよう心がけています。毎週のことなので、先生方との距離感が近いことも魅力の1つです。

休日は、家でじっとしているのが苦手で、折りたたみ自転車と公共交通機関をフル活用し、どこかの街を彷徨っていることが多いです。美味しいカレー・1920年代からの良質な音楽・グッとくるドキュメンタリー映画との邂逅を求め、果て無き巡礼の旅ですが、お陰様で部屋は煩惱（CD・DVD・書物の類）に溢れ、断捨離なんて一生出来そうにありません。



輪行の友（ホントは全4台所有）。

得意ワザ：輪行、利きカレー、セーフティーバント

自分の性格：我ながら掴みどころがありません

次回執筆者のご指名：兼岡麻子さん

次回執筆者との関係：極寒のボストンで飲み歩いた仲

次回執筆者の紹介：バイタリティ溢れる言語聴覚士

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第115回

産学連携本部のベンチャー支援
～AEA2015優勝～

産学連携本部も共催するアジア・アントレプレナーシップ・アワード（略称AEA）は、アジアの若い起業家が一堂に会する日本発の国際的なビジネス・コンテストです。4回目となる今年のAEAは5月24～26日の3日間にわたり柏の葉カンファレンスセンターで開催され、東京大学アントレプレナープラザに入居する株式会社サイフューズ（<http://www.cyfusebio.com>）が優勝しました。

株式会社サイフューズは、生きた細胞を3次元積層する独自の「バイオ3Dプリンター」Regenova®（レジェノバ®）を開発し、この装置を用いて細胞から様々な組織や臓器を再生して患者に移植する再生医療の実用化を目指すベンチャー企業です。元々は2010年に九州大学の研究成果を基に設立された会社ですが、株式会社東京大学エッジキャピタルからの出資を受け、2013年に本郷構内で産学連携本部が管理運営するインキュベーション施設である東京大学アントレプレナープラザに移転しました。現在、東京大学をはじめ各種研究機関とのコラボレーションを通して様々な臓器・組織の再生技術の確立に取り組んでおり、今年からはバイオ3Dプリンターの海外での販売も開始します。

AEAにおいてサイフューズ社は、事業の革新性やその社会的インパクト、競争優位性や事業の実行力などの面で審査委員から高い評価を受け、アジアの12の国や地域から出場した30社の中から最優秀賞であるグランプリを見事に受賞しました。産学連携本部は、このようなイベントを通してベンチャー支援の仕組みをより強固なものにしていきたいと考えています。



AEA2015で優勝した（株）サイフューズの代表取締役口石幸治社長（中央）。

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

インタープリターズ・ バイブル

第95回

教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

松田 恭幸

「失敗した」研究ってあるの？

東大素粒子物理国際研究センターが中心になって進めている研究プロジェクトの一つに MEG 実験がある。ミュオン粒子という素粒子が光子を放出して電子に崩壊するという、今まで60年以上にわたって誰も見つけたことがない稀な崩壊過程を見つけようという実験である。MEG実験は2008年からデータの取得を開始し、約8兆個のミュオン粒子の崩壊を観測したが、現在までにこの過程は見つかっていない。

知人と話しているときに、この研究は失敗なのか？と訊かれて絶句した。とんでもない！ある現象が起こらない（起こりにくい）ということを知ることは、ある現象が起こるとということを知ることと同じぐらい科学の進展にとって重要である。このことを力説しようとして、はたと我が身を振り返った。本当に自分たち研究者はそのことを認識しているだろうか。

Fanelli による研究^{*1}によれば、科学研究の全分野において、出版論文の中で「ある仮説を提示し、その仮説を実証するデータを得た」と主張する論文が占める割合は年々増加し続ける一方で、「ある仮説に基づいて研究を行ったが有意な結果は出なかった」「ある先行研究の結果は再現できなかった」という論文の割合は減り続けているという。

こうした傾向を生む要因の1つとして、「ある仮説を提示し、その仮説を実証するデータを得た」という論文の価値が、そうではない論文に比べて高いと考える "positive bias" が、出版社側にも研究者側にも存在していることが挙げられる。この傾向が強くなると、誰かがすでにやって失敗すると判明している研究を世界中で誰かがまた繰り返し、一方で、再現性が乏しい研究結果が反証されないままに一人歩きすることになりかねない。"positive bias" は、研究不正と同じく、科学の健全な進展（と社会の発展）の障害となり得るのだ。

エジソンは「私は失敗したことはない。うまく行かない 10,000 通りの方法を発見したのだ」と語ったと言われている。いわゆる「うまく行かなかった結果」を積極的に意義あるものとして認める姿勢が、研究者集団だけではなく、研究者を雇用する大学・研究所にも、また競争的資金を提供する側にも求められているように思われる。

*1 D. Fanelli, Scientometrics 90, 891-904 (2012)

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

救援・ 復興支援室 より

第49回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、
遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動(5月～7月)

5～7月	福島県相馬市「寺子屋」学習支援ボランティア
6月	岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア

ザシキワラシの日常

本部企画課係長(遠野分室勤務)



文：佐藤 克憲

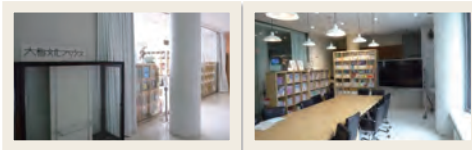
去る5月28日、大学本部からの出張者の視察に同行して岩手県大槌町の中央公民館内にある「大槌文化ハウス」へ行き、町の担当の方からお話を伺ってきました。この施設は、本学総合研究博物館が民間企業3社の協力を得て同町中央公民館の一室を改装し2013年9月にオープンさせたもので、管理運営は同町が行っています。室内は壁沿いに博物館からの寄贈図書(堅い内容のものだけでなく、漫画などもあり)がずらりと並ぶほか、プロジェクター、スクリーンやスピーカーなども整備されています。

設置の目的は、「ハード主体になりがちな復興事業の中で、町の文化の再生創成を行う拠点を設け、大槌町と東京大学の連携により文化復興の諸活動を実践する。」「(大槌文化ハウス)事業目的より)ことで、具体的には大槌町民へレクチャーやワークショップを行う「東大教室@大槌」を2か月に1回の割合で開催しており(講師は総合研究博物館教員)、スカイプを使用してシンガポールと繋いで行った講座もあるそうです。

町の担当の方によると、本教室の対象は高校生以上となっていて、町としては将来を担う高校生にも是非参加してもらおうと高校に本教室のチラシなどを持っていっているそうですが、勉強や部活に忙しい高校生の参加はなく(参加者は60代が多いとのこと)、対象を中学生まで下げる案も出ているそうです。

本教室では今年度から、同町に附属施設(国際沿岸海洋研究センター)がある本学大気海洋研究所の教員を講師に招くレクチャー等も隔回で実施するとのこと、より自分の町に身近な本学の教員がレクチャー等を行うことにより、若い世代の参加者が少しでも出てくることを期待したいところです。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス！」。



(左)大槌文化ハウス入口側(壁がガラス張り)。(右)大槌文化ハウス内部(ぶら下がる照明が特徴的)。

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html
kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp 内線：21750(本部企画課)

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
5月11日	本部人材育成課	平成 27 年度新任教職員研修を開催	4月9日
5月25日	史料編纂所	ロシア国立歴史文書館長らを招聘して「日露関係史料をめぐる国際研究集会」を開催	5月19日
5月27日	本部奨学厚生課	五神総長が「朝食キャンペーン」を視察	5月22日
5月29日	本部学生支援課	第 88 回五月祭が開催されました	5月16日～17日
6月1日	本部学生支援課	本学硬式野球部、今季六大学野球にて法政大学に勝利!	4月11日～5月31日
6月2日	本部広報課	国際広報勉強会が開催されました	5月28日
6月8日	総括プロジェクト機構	東京大学学生チーム、日本で初めてエアバス社 Fly Your Ideas コンテストベスト5に入賞	5月27日
6月8日	本部博物館事業課	総合研究博物館本郷本館にて AMS 公開ラボ竣工記念披露会が開催される	5月29日

お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
6月1日	本部人事給与課	人事異動(教員)	http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動(教員)
6月1日	本部学務課	平成 27 年 5 月 1 日現在の学生数について	http://www.u-tokyo.ac.jp/stu04/e08_02_01_j.html



CLOSE UP

本学硬式野球部、六大学野球で法政大学に勝利!

(本部学生支援課)



毎試合、全身全霊で応援しています。



スタンドの応援にも熱が入ります。

熱戦が繰り広げられた東京六大学野球春季リーグは、5月31日に全日程を終了しました。

本学硬式野球部は、今季も全力プレーで、勝利に向かって挑戦を続けました。

そのなかでも特に多くの方の記憶に刻まれたのは、2015年5月23日(土)に行われた法政大学との一戦ではないでしょうか。

東大は2回に法政打線に先制を許しますが、粘り強い守備で追加点を許しません。そして5回、法政大学の投手が暴投したのを見逃さず、2点を奪い逆転しました。

しかし試合はまだ終わりません。7回には2回の先制点以降、あと一本がでなかった法政打線が息を吹き返し、一挙3点を挙げ再逆転。東大ベンチ、応援席にもさらに熱が入ります。

本学硬式野球部は今シーズン、惜しい試合を何度も経験してきました。終盤までリードを奪っていないながら惜敗を喫した試合がいくつもありました。本学硬式野球部は、これまでどのチームよりも勝負の厳しさ、敗戦の悔しさを体

刻んできたのです。

すると8回。東大打線は息を吹き返します。犠牲フライと3塁打で2点を奪い同点に。試合は延長戦に突入しました。そして延長10回。東大打線は一瞬の間を見逃さず、きわどいタッチプレーを見事かわし、勝ち越しの2点を挙げました。このまま試合は終了し、東大は待ちに待った六大学野球での勝利を手にしました。

この勝利の裏には、フィールドであきらめずに戦ってきた硬式野球部員の努力だけでなく、観客席で声を枯らし、熱い応援・演奏を続けてきた応援部員、そしてスタンド内外で硬式野球部を応援してくださった方々の声援がありました。

続く24日(日)、25日(月)の試合では法政大学に惜敗を喫し、本学硬式野球部は今シーズンの戦いを終えました。勝利を手にしたことはもちろんですが、惜敗を喫したチームにも勝ちに迫る試合をすることができたことは、今後に向けて大きな収穫となりました。

T	0	0	0	0	2	0	0	2	0	2	6
H	0	1	0	0	0	0	3	0	0	0	4

←対法政大学1回戦のスコア。打線は3塁打1本を含む7安打と隙をつく走塁で6点を上げ、投手陣は4人の継投で失点を4に抑え、シーズンを通して堅守を見せてきた守備陣は失策0で投手陣をもり立てました!



CLOSE UP

五神総長が「朝食キャンペーン」を視察 (本部奨学厚生課)



学生と歓談する五神総長と小川教養学部長。

五神総長が、5月22日(金)午前8時、教養学部駒場キャンパスの駒場食堂1階カフェテリア若葉で実施している「朝食キャンペーン」を視察しました。

五神総長は、本年度の学部入学式の式辞の中で、新入生に対して、大学での学びを通じて「知のプロフェッショナル」を目指して挑戦してほしい、と述べました。その前提として、「規則正しい生活をする事」、具体的には、朝、きちんと起きて朝食をしっかりと食べた上で授業に出席することを勧めました。

本キャンペーンは、朝食の重要性に基づき、東京大学消費生活協同組合の協力を得て、試行的に5月18日(月)から29日(金)までの2週

間(平日限定、7:30~10:00)に実施した企画で、本学学生は9時までに来店すれば、半額で朝食の提供を受けることができました。この間、延べ2772人の学生・教職員が本キャンペーンを利用しました。このうち、半額で朝食の提供を受けた学生は、延べ2546人です。

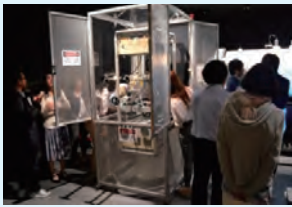
五神総長は、小川教養学部長と教養学部の学生達と一緒に終始和やかな雰囲気の中で朝食をとり、朝食後の歓談も和気藹々とした中で予定の8時30分まで過ごされました。

今後の「朝食キャンペーン」の実施については、今回の結果を詳細に検討してから決めていくこととなりますが、学生からは本キャンペーンの継続を希望する声が多く寄せられています。



CLOSE UP

AMS公開ラボ竣工記念披露会が開催される (本部博物館事業課)



施設内を見学する関係者たち。

※ AMS (Accelerator Mass Spectrometry)
主に放射性炭素(14C)を測定して、様々な有機物が何年前につくられたのかを決定する年代測定のための加速器質量分析装置。

総合研究博物館本郷本館にて、最先端のコンパクトAMS* (加速器質量分析装置)を展示室に配置した「AMS公開ラボ」の竣工記念披露会が、平成27年5月29日に開催されました。

西野嘉章総合研究博物館長より、開会の挨拶と出席した学内外の関係者に感謝の言葉が述べられ、伯東株式会社、株式会社パレオ・ラボ、吉田邦夫総合研究博物館特招研究員には、AMS公開ラボの設立に尽力したとして感謝状が渡されました。

今回、本郷本館に設置された「コンパクトAMS」は、極微量の放射性炭素を専門に測定する分析装置で、加速器の中では比較的低い電圧で測定ができるため、放射線管理区域外でAMS測定が可能となり、展示空間への設置が

実現しました。

本郷本館は、「知の回廊」事業(新たな知が生み出される研究現場を間近に感じることができる「研究現場展示」を創出する計画)による改装のため、現在休館していますが、今回お披露目したAMS公開ラボは「研究現場展示」の核となる施設です。

本郷本館の再開は2016年を予定しており、総合研究博物館の前身である総合研究資料館が発足したのが1966年、総合研究博物館に改組したのが1996年と、それぞれ節目の年でもあります。今後も皆様のご期待に添えるよう、魅力ある博物館としての機能を充実させるように努力してまいりますので、皆様のあたたかいご支援をよろしくお願いいたします。



CLOSE UP

「日露関係史料をめぐる国際研究集会」を開催 (史料編纂所)



クリモフ研究員の第2報告。



チェルニャフスキー館長の第3報告。

5月19日(火)、史料編纂所(山家浩樹所長)では日本学士院と共催による「日露関係史料をめぐる国際研究集会」を開催しました。当日は3本の報告が行われ、参加者は全国からの専門研究者を含む約60名でした。

第1報告は、研究代表者の保谷徹教授(史料編纂所)から、「在外日本関係史料のデジタルアーカイブ化プロジェクトについて」と題し、在外日本関係史料150万コマ余(20か国以上70機関以上)のデジタルアーカイブ化を中心とするプロジェクト研究の概要が報告されました。ロシア史料のDB化と検索・閲覧方法の開発も大きな課題となります。

第2報告では、ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所ワジム・クリモフ上級研究員が、「1862年日本使節団のロシア訪問」と題し、幕末の竹内使節団のサンクトペテルブルグ訪問に

ついて、ロシア側で使節を図書館や軍港クロンシュタットへ案内した様子を紹介しました。ロシア側史料からロシアが何を使節へ見せたかったのか、そして日本の使節がそれをどう記録したのか、参加した福沢諭吉の渡航記にどう書かれていたかなど、興味深いお話でした。

第3報告は、帝政ロシアの中央政府史料約750万ファイルを所蔵するロシア国立歴史文書館のセルゲイ・チェルニャフスキー館長から、「エヴゲニイ・イワノヴィチ・アレクセエフ提督—海軍司令官にして政治家」と題する報告がありました。ご報告は、同館長が前任の海軍文書館長時代に取りまとめた日本・朝鮮関係史料の解説目録にもとづき、日露戦争期の海軍提督アレクセエフのフォンドを分析したものでした。従来低く評価されがちなアレクセエフの実像に焦点をあて、再評価を求めるとご報告でした。



スタヴローギンとセキュリティ

毎年、情報セキュリティの講義の途中で、学生たちに質問する。

「インターネットのむこう側に、スタヴローギンがいるとしたら、何をしかけてくるでしょうか？」

理科系でも文科系でも、ここで99%の受講生がポカンとする。スタヴローギンを知らないのである。

ニコライ・スタヴローギン。ドストエフスキーの小説『悪霊』の主人公。知力・体力・美貌の三拍子がみごとに揃ったニヒリスト。テロリスト達の黒幕にして、シャートフ殺害の背後にいる人物。

こういう人物にネットのむこうから狙われたら、私や君たちを含む世界中の人々は例外なく殺されるか、無一文にされるだろう。電子カルテの改竄、上水道への毒物注入、銀行やクレジットカードからの窃盗など、赤子の手をひねるようなものだ。不治の感染症に罹患させられ、でっちあげの罪で社会から抹殺され、屈辱的な姿で路上に放り出される。そんな目に合わされることだろう。

ネット社会では、ゼロデー標的型攻撃（未知のウイルスによる防御不能の攻撃）などを駆使すれば、たいがいのことはできてしまう。

たとえば、イスラエルと米国（おそらく

NSA）は、2010年、コンピュータウイルスを使って、遠隔の地からイランの核施設を麻痺させた（ニューヨークタイムズ等による）。

今の社会の安全・安心を技術だけで守ることはできない。その上に法律の規制や高度なマネジメントがあっても、守り切るのは無理だろうと私は思う。

スタヴローギンは、小説に描かれた最も深刻な危険人物と言われる。だが、『悪霊』を読んでいなければ、こういう人物が何を考え、どういうふうに社会を壊そうとするのか、想像することもできないではないか。こういう人間が世の中を脅かすのを想像してみることこそ、安全・安心には必須のことなのに。

私の講義で、毎年、多くの学生がコンピュータの動作原理や暗号の仕組みを学んでいく。彼らはその知識をもって役所や企業や大学で活躍することになる。しかし、『悪霊』を読んで人間の心の暗部に目覚める学生はほとんどいない。

私はとても不安だ。

坂井修一
(情報理工学系研究科)